

〔書言字考節用集二時候〕朔日又云吉月活法初一日爲朔上日尙初吉詩

〔日本釋名上時節〕朔 月たつ也

〔東雅一文〕日ヒ 朔をツイタチといふは月立也、我國の俗、凡事の始をタツといふ、立春、立秋を、春たつ、秋たつと云がごときこれ也。

〔倭訓榮都編十六〕ついたち 朔をよめり、月立也、月の立初るをいふ、春たつ、秋たつといふがごと

し、月吉とも見ゆ略。白虎通に、朔之言蘇也、明消更生故言蘇也と見ゆ。

〔東都歲事記四〕二月朔日 乙子朔日として、諸人餅を製し祝ふ中略今日製する餅を、乙子のもちとの義ともいへり、此日餅を食へば、水難なしといへる俗習によりて、武家にてもこの事あり、交代の砌、海上安全を祈らるいこ、いるなるべし、船宿、船頭の家にては、とりわき祝ふなり、

〔年中行事故實考十二〕二月朔日 俗に乙子のついたちといふ、人家の末子餅をつき祝をなす、いつ頃より始れるといふ義を、えらす、一年の終にあたる朔日なるゆゑ、いはひたるにや、

〔日本書紀天智二十七〕十年十一月癸卯、對馬國司遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久、筑紫君薩野

馬、韓島勝、婆々、布師首磐、四人從唐來日略。下

〔榮花物語若ばえ〕はかなくて萬壽二年正月になりぬ中略。枇杷殿藤原研子には、ことし大饗させ給はんとていそがせ給略。中ついたち二日、臨時客とて、其日女房かすをつくしていろくを

きたり、

〔萬葉集六雜歌〕同伴。大坂上郎女初月歌一首

月立而直ツキタテナカ三日ミカ月之眉根搔ツキノメノカキ氣長戀之君爾キナガコヒノキミニ相有鴨アハルカモ

〔蜻蛉日記下之中〕なほありのことやとまら見るまで、ついたち三日天延元の程に、むまの時ばかりに見へたり、

〔榮花物語二十五〕かくて皇后宮原城子中略、つねに三月萬壽二年つごもりに、花とともに別れさせ